リベルタ通所者の就労体験記

私は今、日立物流という会社に勤めています。仕事の内容はピッキングという仕事をやっていまして、内容はピッキングリストと呼ばれる紙に書いてあるものを見て、チェックをしてもらうのが私の仕事です。
時間は８時３０分から１５時１５分までです。毎朝７時３０分には家を出なければなりませんので毎朝大変です。場所は家から約二キロのところにあるので４０分で着きます。

職場の方は親切で色々なことを教えて下さいます。偶(たま)に早くと言われることもありますが、それはスピードを求める場合もあるのでいた仕方ありません。楽しい時はやはりやり遂げた時で達成感がたまりません。
諦めそうになったことは何度もありますが、私には目標があり、それに向かって頑張っていこうというのを忘れずにやっています。難しそうな時も諦めずにそうやって乗り越えてきました。最後に、仕事をやって感じたことを書きます。
一般職はリベルタと違って疲れが比べ物になりませんし、遅刻・欠勤も病気の時以外は許されません。
やはりやるべきことは
・遅刻・欠席はせずにリベルタに来ること。・積極的に清掃とかに参加して体力を作ること。
・挨拶を忘れないこと。・与えられた仕事は最後までやり遂げること。
・年上を敬うこと。・私語は必要最低限慎むこと。です。
あとは会社に見学へ行くと良いと思います。

２０代　男性　高崎市在住
リベルタ通所歴　５ヶ月　就労移行
物流（ピッキング作業）23 年度就労

リベルタ通所者の就労体験記

「一歩踏み出して」

今、私は事務の仕事をしている。ファッション・雑貨のブランドを持つ会社で、普通の会社の事務には無い楽しさがある。電話は、基本的にショップ店員とのやり取りで、新店がオープンした時には、ショップの写真が回覧として回ってくる。私の働く事務センターは、約 10 人の小さなオフィスで、この事務センターと東京の本社の事務とで全国のショップの事務処理を行っている。

入社当初は、人事の入社書類などのデータをパソコンに入力する作業を任されていたが、３か月経った今は、様々な仕事をさせてもらえるようになり、毎日が勉強で、とても充実している。今、事務センターの仕事が上手く回るように見直しを行っている時期のようで、仕事のやり方を一緒に模索していくのも楽しい。

もちろん、仕事を続けていて大変なこともある。通勤だけで１時間半かかるので、往復で３時間。事務は、特に目を酷使する職業なので、読書も通勤時だけにして、帰りは遠くを見るよう心掛けている。

私がリベルタで過ごした日々は、１年と９カ月。とても楽しく、充実した毎日だった。友達と比べることはせず、『自分の人生を、今を、楽しく生きる』という考え方でやってきた。そう考えると、病気との付き合いがとても楽になった。病気も含めて、自分の人生なんだと思った時に、障害者雇用を考えるようになり、積極的な性格も手伝ってリベルタへの通所がトントン拍子に決まっていった。　リベルタで仕事をしながら、常に頭の隅に置いていたことがある。それは、「今はスキルアップの時間なんだ。今、この時間をどう使うかは自分次第だ。」というもの。だから、パソコンの資格も取り、リベルタでの仕事も好き嫌いせずにチャレンジした。楽しい毎日の中で、確実に経験を重ねていき、その経験は自分の財産となる。私にとってのリベルタは、学校のようなものだ。様々な経験を重ね、少したくましくなった気がする。

今、リベルタを出てみて思う。リベルタでの経験は、社会に出て必ず役に立つものだったのだと。私は、パソコンの資格を取った時には、事務をすることになるなど思ってもいなかった。しかし、今、こうして事務の仕事に就けたのも、資格のお陰でもあるのだと思う。何にでもチャレンジすることは大切だ。今回の就職をきっかけに、改めてそう感じた。そして何より、毎日の楽しい生活があったのは、個性的なスタッフさんと優しいメンバーさんたちがいてくれたお陰だ。

皆さんに心から感謝したい。そして、今後の私の成長も見守っていてほしい。

２０代　女性　安中市在住
リベルタ通所歴　約１年９ケ月　就労移行
ファッション雑貨（事務職）22 年度就労

リベルタ通所者の就労体験記

今の職場に就職するに際して、障害者就業・生活支援センターエブリィのお世話になった。
エブリィではワーカーの方と面接して自身の病気の話・これまでどんなアルバイトをしてきたか・これからどんな仕事をしたいかなどを懇切丁寧に聞いて下さった。しかし希望の職種を聞かれ”はた”と困った。これがしたい。という熱い思いがないのだ。春先に街中を歩いていると、まだスーツを着慣れていない就職活動中の学生をよく見かける。しっかり自己分析して何を聞かれても自分をアピールできるであろう彼らを眩しく見ていた。煽って自分はどうか。資格といったら車の免許だけど、ギターは少々弾けるがそれで飯を食っていけるというレベルではないし、本もよく読むのだが書評家としてやっていけるほど深く読み込んではいない。作家にも憧れるが３回くらい生まれ変わらないと無理だろう。ワーカーの方を前にして何も自己アピール出来ない私は就職活動中の学生の足元にも及ばないが、ひとつだけはっきりしていることを伝えた。「社会と接点が持てれば何でもいいです。」と。
この病気を発症した当時、一週間くらい記憶が抜け落ちていて、何も飲めず何も食べられず、後で親父から「あの時お前は死んだと思った」と言われた。そんな体験をしているので、まず生きていることに感謝し、働けるのであれば何でも構わないという気持ちが強い。
もちろんやりたいことがあればその方向に向かって努力すればいい。しかし、何がやりたいか分からないという場合、就職というのをひとつのステップと捉えて、働きながらやりたいことを見つけたり、自分の知らない自分を知るようになればいいのではないか。というのが私の持論である。好きなことというのは原っぱを駆け回る子供が無心で遊ぶように、気がついたら夢中になっていたという類のものではないだろうか。ワーカーの方の勧めで適性検査を受けてみたらどうかというので、前橋のハローワークへ行くことになった。
リベルタの軽作業で培った腕前を思う存分発揮してやろうと意気込んだが、手を使った作業の検査結果は「手先が不器用であまり工場などの作業には向いていません」というものだった。約二年間働いたリベルタの日々はなんだったのか。とショックだった。頭を使う検査にもトライしてみて、そちらの方は適性有りとの結果が出て事務職などの仕事を勧められた。しかしパソコンに対する苦手意識が昔からあるので、時代の流れに逆行するようだが、パソコンを使わない仕事がしたいというのがホンネだ。
　最後に今現在の私について少しだけ。生活雑貨・衣服雑貨・食品を扱う店舗のスタッフとして店内を駆け回っている。とにかく商品の数が多く、消えていくものもあれば新商品として登場するものもあり、その都度商品知識を頭に入れなければならない。それでも全商品を把握出来ているわけでは無いので、お客様からのお問い合わせに対して、わかっていることにはすぐ応え、分からないことに関しては少々時間を頂いてお調べする。という対応をとっている。インカムという便利なものもあり、自分の力の限界を感じたら他のスタッフの助けを借りることも出来る。土曜日、日曜日の混雑時は店内が人で溢れ返り、逃げ出したくなる時もある。それでも一年間仕事が続いたのは、困っていた時に手を指し伸べてくれた周りのスタッフの存在だ。この病気になってしまった要因に人間不信が挙げられるが、今社会生活を送る中で「人は自分が思っているよりもずっと温かいものなのではないか」ということを強く感じる。

３０代　男性　高崎市在住
リベルタ通所歴　約２年６ケ月　就労移行
日常雑貨用品販売（サービス業）21 年度就労